

宗論における存覚の論法——『諸宗問答口作集』を手がかりに——

武 宮 真 如

はじめに

本研究は、親鸞門流の学僧である存覚（一二九〇—一三七三）について、宗論における論法を検討するものである。

存覚は親鸞（一一七三—一二六二）の『教行証文類』を初めて注釈した『六要鈔』の著者として、また本願寺第三世の覚如（一二七〇—一三五二）の長子として知られる。

『存覚一期記』^①によると、存覚は暦応元（一三三八）年に法華宗徒と対論している。これを契機に著されたとされるのが『決智鈔』と『法華問答』である。両書は宗論の体裁を有しており、存覚における日蓮教学への応答内容がうかがわれる。ただし、その詳細を明らかにするには、法華宗徒が宗論のために自用した史料の参照が求められよう。その条件を満たす史料の一つが『諸宗問答口作集』^②である。

『諸宗問答口作集』は、その書写本が広島県福山市水呑町重顕寺に所蔵され、華嚴宗、三論宗、法相宗、律宗、俱舎・成実宗、浄土

宗、真言宗、禪宗、天台宗との宗論に備える手引書という性格を有している。同書により、法華宗徒が宗論に際して想定していた論法をうかがい知ることができる。

同書の存在は、柴田章延によると、一九二七年に日蓮宗の宗宝調査で確認されたものの太平洋戦争の空襲で調査台帳が焼失し、しばらく忘れられていたという^③。それが二〇一一年の資料調査を機に翻刻され、現代語訳とともに公開された。重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会発行の『諸宗問答口作集』^④がそれである。

同書で柴田章延は「存覚上人との宗論について」と題し、『法華問答』との関連に言及している。ただし、ここでは『法華問答』が宗論の記録であるという前提で述べられており、無批判には受容できない^⑤。また『諸宗問答口作集』の書誌もいまだ判然としておらず、存覚の対論相手が日行であるという根拠も明瞭でない^⑥。成立年代の検討を含め、あらためて事実関係の整理が求められる。このほか注意されるのは、『法華問答』において『諸宗問答口作集』の応答例が用いられない争点への言及である。

『諸宗問答口作集』には「諸宗謗法ハ随テ口作ニ可問答ス」といわれるように、特定の争点に対する応答例が示されている。柴田章延はこれを踏まえ、『法華問答』の特定の争点に『諸宗問答口作集』の応答例が認められない点に言及している。ここでは存覚が記録しなかったか、日行が応答を控えたためかもしれないと述べている。^⑧

しかし、これらの争点について『法華問答』を検討すると、異なる事情が注意される。すなわち、法華宗徒が反論しづらい点を理解した上で用いられた存覚の論法によるためではないだろうか。

そこで本論では、まず『諸宗問答口作集』の先行研究を整理し、所見を提出する。次に『諸宗問答口作集』と『法華問答』から四つの争点を挙げ、宗論における存覚の論法をうかがう。第一は『法華経』に説かれる舍利弗が見た授記の解釈である。第二は法華宗における師資相承である。第三は『選択本願念仏集』（以下『選択集』）における「且」と「捨閉閣抛」の解釈である。第四は『法華経』と念仏に対する勝劣への言及である。

なお、読解の便をはかるため、本稿では原則として通用字体を用いる。

一 『諸宗問答口作集』の書誌

ここでは『諸宗問答口作集』の先行研究を整理し、所見を提供する。『諸宗問答口作集』の原本は発見されていない。著者は日蓮

(一二三二—一二八二)の弟子である日像(一二六九—一三四二)との関連が指摘されている。成立年代は不明であるものの、文永九(一二七二)年以降と推察される。

一— 『諸宗問答口作集』の著者

『諸宗問答口作集』の著者について、先行研究では日像との関連が指摘されている。日像は日蓮の定めた六老僧の一人として知られる。永仁二(一二九四)年に京都へ進出し、一時は院宣によって京都を追放されるものの、元亨元(一三二二)年に妙顕寺を建立、同寺は建武元(一三三四)年に勅願寺の綸旨を受けている。^⑨

このように京都で教線を拡大した日像について、『諸宗問答口作集』の著者である可能性に言及するのが柴田章延である。柴田章延は重顕寺蔵本の奥書を手がかりに次のように述べている。

奥書では、鶏冠井村真言寺実賢が日行の兄弟子であり、その口入れにより『諸宗問答口作集』を写写することが出来たとされているが、原本の著者に関する記述はない。(中略)実賢の師は日像であるから、実賢の口入れで書写したという事になれば、『諸宗問答口作集』原本の著者は日像の可能性が非常に高い。^⑩

奥書によると『諸宗問答口作集』は日行の兄弟子である実賢の口入れで書写されたものであるという。実賢の師が日像であることから、日像が著者である可能性が非常に高いという。ここでいわれる奥書とは次のとおりである。

一 諸宗問答集一卷依実賢口入奉拜写者也

一外二日像聖人御本尊一幅為改宗褒美
所被遣也

洛西乙訓鷄冠井村真言寺実賢者

本末為余師兄也像師命彼僧而示法

花之深義余信伏随從而忽捨密宗

帰一乘因茲件之重宝奉感得者也

清光山重顕寺住僧

于時応長元大才幸亥仲陽良日 戎善院日行（花押）^⑪

重顕寺の開基である日行が応長元（一三一）年に書写した様子を伝えていた。ただし、この奥書の一紙のみ筆跡や虫損の跡が他と異なり、後筆であるとされる。^⑫

このほか、以下の先行研究によって日像との関連が指摘されている。『水呑町史』には「同寺には宗門の重大霊宝として日像作の諸宗折伏の要文要記を自筆せる、秘蔵録上中下三巻があるが、重顕寺の諸宗問答口集^{（ママ）}は此れの写しではあるまいかと云はれる。」^⑬といい、『諸宗問答口作集』は『秘蔵録』の書写本と伝えられるという。また小林定市によると「『秘蔵集』の写と推定される『秘蔵録』三巻が南真経寺に伝えられていて、重顕寺の『諸宗問答集』も南真経寺の『秘蔵録』の写しであるかと推定されている。」^⑭という。つまり、『秘蔵集』の書写本が『秘蔵録』、『秘蔵録』の書写本が『諸宗問答口作集』とされるという。『秘蔵集』と『秘蔵録』については調査

中である。^⑮ともあれ、いずれの書物も日像に由来する旨を述べる点で先行研究は共通している。

一―二 『諸宗問答口作集』の成立時期

『諸宗問答口作集』の成立時期について、柴田章延は複数の観点から推察を試みている。

まず、重顕寺蔵本の書体を「所謂「くりくり文字」と呼ばれる、鎌倉時代から室町時代初期によく見られるものである。」^⑯と述べている。次に、『諸宗問答口作集』の「経ニモ無キ事ヲカマヘテ云ヘトモ権教ニテ候間何トシテモ亡国墮獄無疑者也」^⑰という文について「釈尊の説かれた経にもないことを構えて（なんとかして）云おうとしても、権経^{（ママ）}である限り、どうしても亡国墮獄は疑いのないことである。」^⑱と現代語訳し、次のように述べている。

「カマエテ^{（ママ）}」という語は、鎌倉期から南北朝期にかけては否定・肯定何れの語とも結びついて使用されたが、室町期には否定語と結びついて使用されることが定着した。ここでは肯定する語と一緒に使用されているので、『諸宗問答口作集』は南北朝期に著されたものであるという一つの証左となるものである。^⑲

「カマヘテ」が肯定する語とともに使われているといい、南北朝期に著された一つの証左であるという。また次のように述べている。

「又何トシテモ真言亡国難シ通 代々ノ帝王持之玉フ」という部分であるが、これは日像が日蓮聖人より帝都弘通を委嘱され

たという伝承を強く連想させる一文である。日像が後醍醐天皇より妙顕寺を勅願寺とする綱旨を給わたるのが建武元年（一二三三）^四であるが、『諸宗問答口作集』の記述を見る限り、日像による著作年代はこの年をさかのぼることは確実である。²⁰

「代々ノ帝王持之玉フ」という点から、妙顕寺が勅願寺となる前の成立であるという。

このように柴田章延は書体、語句の用例、内容から想起される日像の伝承に基づき、『諸宗問答口作集』の成立は建武元（一二三三）年をさかのぼると述べている。

このほか成立年代の推察に際して注意されるのは、『諸宗問答口作集』が『観無量寿経』と『法華経』の成立順序という争点を有する点である。池田令道は「日蓮遺文には、法華経と観経等の後先を論じたり、観経等を法華経以後とする浄土側の主張も見られない」といい、「それが論争となるのは日蓮滅後のことであろう。」と述べている。²¹ 文永九（一二七二）年に成立した『法華浄土問答鈔』には日蓮と弁成の宗論が記録されている。²² 池田令道が指摘するとおり、そこに両経の順序を争う様子は認められない。²³ したがって、『諸宗問答口作集』の成立年は文永九（一二七二）年以降と推察される。その他の手がかりに、『安楽集』と『大集経』の問題を右の争点に応用する様子が『金綱集』との関連から注意される。²⁴ 詳細な検討は『金綱集』の「日王丸本」と「日進本」の翻刻がまたれるため、今後の課題である。²⁵

以上、『諸宗問答口作集』の先行研究を整理した。所見として、著者については『秘蔵集』あるいは『秘蔵録』との照合による研究成果が期待されること、成立年代については文永九（一二七二）年以降と推察されることを示した。

二 『法華問答』における存覚の論法

ここでは『諸宗問答口作集』と『法華問答』から四つの争点を挙げ、宗論における存覚の論法をうかがう。存覚は、法華宗徒が批判しづらい対象を釈尊、智顛（五三八―五九七）、最澄（七六七―八二二）と理解し、これらを引き合いに出すことで法華宗徒の反論を回避しようとしたのではないだろうか。また、『選択集』を注釈することで、念仏と諸行に勝劣の義を立てつつ、法然に対する謗法の批判を回避しようとしたのではないだろうか。

二―一 舍利弗が見た授記の解釈

法華宗徒の正依の經典である『法華経』には「我昔從仏聞如是法。見諸菩薩授記作仏。」²⁶と説かれている。「我」こと舍利弗は『法華経』が説かれるより前に諸菩薩の授記を見たという。法華宗徒において爾前の經典は未顕真実とされるため、ここでいわれる授記がどのように解釈されるかが争点である。

舍利弗が見た授記の解釈について、『諸宗問答口作集』は最澄を根拠に、成仏までに歷劫を要する授記であると主張する。一方で

『法華問答』は智顛を根拠に、方等における菩薩の授記であると主張する。また、爾前にも得益が存すると主張する。智顛や最澄は日蓮教学で重用される人物である。存覚は智顛に根拠を求めることで、爾前の經典を未顕真実とする法華宗徒の理解を批判するとともに、反論の回避を試みたのではないだろうか。そこで以下、『諸宗問答口作集』と『法華問答』の主張を検討する。

まず『諸宗問答口作集』は「但已舍利弗ノ領解ノ文二者以舍利弗ノ言ヲ不可壞仏菩薩ノ金言ヲ」といい、舍利弗の発言を用いないよう法華宗徒に注意している。それでも対論相手から言及された際には次のように応答するよう述べている。

何ソ舍利弗ノ言ヲ用耶 況ヤ舍利弗迷惑ノ人也 サレハ經ニハ云テ失於如来無量知見ト如来知見ヲ失フ人也 何此人ノ言ヲ信テ等妙ニ覺ノ金言ヲ背ク条甚深失也 就中舍利弗ハ法花已前ニ於テハ歴劫授記ヲ見テ直道ノ授記ヲハ不見ニ 歴劫授記ト者一座ノ授記也 並座ノ時ハ終不始成授記也

舍利弗は如来の知見を失う迷惑の人であるから信用できないという。また、舍利弗が見た授記とは歴劫の授記であって直道の授記ではないという。歴劫の授記とは釈尊一座の授記で歴劫を要し、直道の授記とは「並座ノ時」すなわち釈尊と多宝如来が並座する際の授記をさすという。このように授記を区別する根拠が次のように述べられる。

秀句上云 舍利弗見此歴劫ノ記ヲ 発感傷之悔ヲ 法花已前

ノ教ニハ不説直道法ヲ 誰カ修直道ノ行ニ 已ニ不直道行ニ 誰得直道記ニ 已ニ無直道記ニ 舍利弗何ヲ見 舍利弗不見ニ 何發咨シ嗟悔セン 但聞テ因分ノ円教ヲ 別門ニ悟円人ニ 雖似九日月ニ不如十五夜ニ 華嚴已來被隨宜ノ法ニ 本法ハ法花ナリ 々々已前ニ都テ不説 故經云 世尊法久後 要當説眞実云々

『法華秀句』によると、舍利弗は「歴劫ノ記」を見て「感傷之悔」を起こしているという。『法華經』より前の教えは直道の法を説いていないため直道の記を得られないという。『華嚴經』以来は隨宜の法で、本法は『法華經』であるという。經典にいわれるように世尊が方便の後に眞実を説くのはこのためであるという。

以上、『諸宗問答口作集』の主張を検討した。『諸宗問答口作集』は法華宗徒に舍利弗の発言を用いないよう注意している。また、『法華秀句』でいわれる感傷を引き合いに出し、舍利弗が見た授記とは成仏までに歴劫を要する授記であると主張している。

一方で『法華問答』は智顛の『法華文句』を引用し、次のように述べている。

『法花』第二「譬喩」品にははく、「われむかし、仏に隨ひてかくのごときの法をきき、もろもろの菩薩の授記作仏をみたり。しかるにわれらこの事にあづからずして、はなはだみづから感傷す」といへり。大師この文を釈して『文句』（法華文句卷五）上 釈譬喩品にははく、「たゞこれ方等教のなかに、大乘の実恵をききしと。い

まことならず。かるがゆへに如是法といふなり。授記といふは、たゞこれ方等のなかの菩薩に記をあたふ。二乗はこの事にあづからずして、はなはだみづから感傷す」といへり。かくのごときの経釈、爾前の得益にあらずや。²²⁾

『法華文句』によると、舍利弗が見た授記とは方等教における大乘の実恵であり、今と異ならないという。また、舍利弗の感傷とは授記の対象が方等の菩薩であり、二乗がこのことに預からないことに由来するという。これら智顛の経釈は爾前の得益を示すものであると主張している。引き続き次のように述べる。

大師、妙の字を釈していはく、「この妙とかの妙と、妙義ことなることなし」(法華玄義卷二上)といへり。「この妙」といふは『法花』なり。「かの妙」といふは『花嚴』なり。大師のこゝろ、二經の義またくこれおなじ。²³⁾

智顛の釈を引き合いに出し、『華嚴經』と『法華經』の義が同じであるとして述べている。五時八教判において『華嚴經』が説かれたのは華嚴時、すなわち法華宗徒における未顕真実の時期である。存覚は、智顛を用いて『華嚴經』と『法華經』の義が同じであると述べることに、華嚴時の後である方等時にも得益が存すると主張したものと考えられる。

このように『法華問答』は日蓮教学で重用される智顛を引き合いに出して爾前の得益を述べている。このような論法により、存覚が爾前の經典を未顕真実とする法華宗徒の理解を批判するとともに、

反論の回避を試みた可能性が指摘される。

二二二 法華宗における師資相承

『諸宗問答口作集』には「諸宗一同ノ難ニ云 法花宗ノ立義ハ只日蓮ノ義也全ク非師資相承ノ法門ニ」と記されている。法華宗は日蓮のみの義であり、師資相承の法門でないという批判を諸宗一同から被っているという。このことから、法華宗徒の宗論において師資相承が争点であったと知られる。

この争点について『諸宗問答口作集』は、法華宗は積尊の所立であるから、相承がないと述べるのは謗法であると主張する。一方で『法華問答』は、智顛や最澄を引き合いに出し、浄土門流に対して念仏無間と批判するのは『法華經』の深意を解さないためであると主張する。その過程で法華宗の師資相承の問題を批判している。存覚は、法華宗徒が批判しづらい対象を智顛や最澄と理解し、念仏無間への応答と法華宗における師資相承の批判を試みたのではないだろうか。そこで以下、『諸宗問答口作集』と『法華問答』の内容を検討する。

法華宗に師資相承がないという批判に対し、『諸宗問答口作集』は次のような応答例を示している。

相承云 凡師資相承ト者依ヲ金言ニ相承ト可云ニ也 論師人師等ノ依ルヲハ口伝ニ不可云相承トハ涅槃經ノ依法不依人等云々 十住毘婆娑論云龍樹尺 依修多羅白論不依修多羅黑論

云々 玄十云 与修多羅合者録而用之無文無義不可信受云々
 秀句下云 誠願クハ一乗ノ君子依憑シテ仏説ニ莫レ信コト口
 伝ニ仰信誠文莫信偽会也 又云 葉王今告汝我所説諸経而於此
 經中法花最第一已上經文³⁵

師資相承とは金言によるのであり、論師や人師の口伝によるのではないという。『涅槃経』は法によって人によらないことを説き、龍樹は修多羅によることを白論、修多羅によらないことを黒論と釈しているという。また『法華玄義』には、修多羅と合すれば用い、文や義がなければ信受すべきでないといふ述べられるという。また『法華秀句』には、口伝を信じず仏説に依憑するよう述べられるという。そして経文（『法華経』を指すか）³⁶には、諸経において法華経が最第一であると葉王菩薩に向けて説かれるという。この経文を踏まえ、次のように述べる。

尺迦世尊ノ立宗之言ハ法花経に為玉ヘリ 極金口校量深可信
 受哉云々 依ラハ此等ノ解尺ニ押テ汝等ニ可云ト謗法ト云フ
 ハ是也 其故ハ既尺尊所立ノ法花宗ヲ無相承ト云フ是レ非謗
 法ニ耶³⁷

釈尊の立宗の言は『法華経』に認められるという。それにもかかわらず釈尊所立の法華宗に相承がないと述べるのは謗法ではないかという。

以上、『諸宗問答口作集』の主張を検討した。『諸宗問答口作集』は『涅槃経』、龍樹、智顛、最澄、葉王菩薩への釈尊の説法を引き

合いに出し、師資相承とは經典の金言によると述べている。その經典の最第一は『法華経』であるという。これを釈尊の立宗の言と解し、相承がないという批判は謗法であると主張している。

一方で『法華問答』は法華宗における師資相承の問題について、念仏無間への反論に付随して次のように述べる。

しかるに天台大師は、法花三昧をえて『法花の疏』^{（法華玄義 卷一下）}をつくり、光宅を破して「余者望風」といふ。光宅、七度生じて七度『法花の疏』をつくるといへども、『経』の深意をしらず。いはんや、相伝なくしてわづかに経文ばかりを自見して、諸経の明文にくらくして、漢家・本朝の高徳・祖師の釈を破して、あまさへ念仏無間の業といふ。³⁸

智顛が光宅こと法雲（四六七―五二九）を破したと述べる。そして、法雲でさえ『法華経』の深意を解さないといひ、念仏が無間の業であると述べる法華宗徒の經典理解を批判している。引き続き次のように述べている。

もし法花の深意をしらば、もはら弥陀をたふとぶべし。ゆへい
 かんとなれば、天台大師普門品を釈していはいはく、「一乗妙法蓮
 花経は、観自在の密号なり。淨妙国土にしては弥陀となづけ、
 五濁悪世にしては観音となづく」といへり。またはいはく、「む
 かし靈山にありては法花となづく。いま西方にありては弥陀と
 名けたてまつる。娑婆にしては称して観世音とす。三世の利益
 同く一体なり」といへり。伝教大師のいはく、「はじめ妙法蓮

花経より、をはり作礼而去の文にいたるまで、一々の文字は殊妙の理なり。みなこれ西方の阿弥陀仏也」といへり。かくのごとくの解釈をみるに、法花と弥陀とまたく一体異名なり。(中略) 弥陀を信じて法花をそしり、法花を信じて弥陀をそしらんは、たとへば流をくみて、みなかみを濁すが如し。いはんや、天台大師の解釈にそむきて、相伝なくして別義をたて、しかも法花宗と号す。かくのごときの義、目あらんともがら信用にあらず。³⁸⁾

『法華経』の深意を知るのであれば、阿弥陀仏を尊ぶべきであるという。その根拠に智顛や最澄の解釈を示し、『法華経』と阿弥陀仏を関連づけている。これを踏まえ、いずれか一方でも謗することは水上を汚すようなものであると述べる。また法華宗について、智顛の解釈に背き相伝なく別義を立てていると批判している。引き続き次のように述べる。

そもそも大師の本地をとぶらへば、薬王菩薩の化身、四十二品の無明を断ず。等覚無垢の薩埵、入重玄門の大聖、むかし靈山にありては法花の聴衆、いま晨州にいで、は、また法花の深意をさとる。一代聖教を高覧あること十五遍、しかるにこの一事ををひて、靈山の法花、西方の阿弥陀、各別なるにをひては、あやまて一体と釈せらるべからず。⁴¹⁾

智顛は薬王菩薩の化身であるという。それほどの人物による法華と弥陀の一体説が誤釈であるはずがないという。⁴¹⁾

このように『法華問答』は念仏無間の反論に付随して法華宗における師資相承の問題に触れ、智顛や最澄の解釈を用いて法華宗徒の經典理解を批判している。このような論法により、存覚が法華宗徒による反論の回避を試みた可能性が指摘される。

二一三 『選択集』における「且」と「捨閉閣抛」の解釈

法華宗徒は『選択集』の内容が謗法であると主張する。その根拠は「且」や「捨閉閣抛」と概括される漢字である。⁴²⁾ これらの漢字がどのように解釈されるかが争点である。

『諸宗問答口作集』は、『選択集』が『法華経』を排除したり難に配当したりするため謗法であると主張する。一方で『法華問答』は同様の批判に対し、廃立や難易を述べることが謗法であれば、經典の文や智顛も謗法といふのかと反論する。存覚は、法華宗徒が批判しづらい対象を釈尊や智顛と理解して論法に用いたのではないだろうか。そこで以下、『諸宗問答口作集』と『法華問答』の内容を検討する。

『諸宗問答口作集』の「浄土宗問答」⁴³⁾には、浄土門流と法華宗徒の宗論記録を想起させる内容が記されている。

有人云閉捨等ノ尺ハ非ス謗言ニ尺ノ意ハ如我等ノカ者理深経ヲ修行スレトモ難解難入ノ故ニ且ク是ヲ閣テ修シテ他力ノ本願ノ念仏ヲ安々ト詣西方極楽ニ得利根智慧ヲ奉値ニ弥陀観音等ニニ法花ヲ聴聞シテ忽悟ラムト云尺也 永ク非サル可シ捨之也⁴⁴⁾

「有人」こと浄土門流の人物によると、理深経を修行しても難解難入であるため「且ク」さしおくのだという。つまり、永遠ではなく一時の「閉捨等」であるという。これに対し法華宗徒は「難解難入ノ理ト云々何経文ニ耶⁴⁵」といい、難解難入の出典を問う。浄土門流の応答は「法花経云已説今説当説乃至難解等云々⁴⁶」といい、『法華経』が出典であるという。すると法華宗徒は「尋云爾者汝此経ヲ以テ立ル之耶（中略）爾者汝カ依経方便者無異論耶⁴⁷」といい、『法華経』によるのであれば浄土門流の依経は方便であると認めることになるという。また次のように述べている。

一 義云 捨閉閣抛ハ承伏也 但シ依テ且ノ字ニ非スト謗法ノ言ニ云耶（中略）難云若シ人背テ賢王ノ政道ニ不ス仕⁴⁸ 刺ヘ勸万人ニ永ク令ム背カ勅命ヲ乍居其国ニ志シ他国ノ王ニ通セム諸人ヲ教派シテ他国ノ王ニ令仕⁴⁹ 如此乃至一生ノ間セム 然ト云ヘトモ且ク言有之リトテ其科可遁⁴⁹ 耶 其上捨閉ノ二八且ノ字無之 謗法無異論⁴⁹ 耶

「捨閉閣抛」については承伏したという。しかし、たとえ一時であることを指す「且」の字を有しても謗法を免れないという。また「捨」と「閉」を含む語句は「且」の字を伴わないため、もとより謗法であるという。

以上、『諸宗問答口作集』の主張を検討した。「捨閉閣抛」が謗法でない根拠を『法華経』に求めれば、その『法華経』に基づき浄土門流の依経が方便であると理解されるという。また、たとえ一時で

あっても『法華経』を排除したり難に配当したりすれば謗法であるという。

一方で『法華問答』は「しばらく不堪の機に対して、ひとへに念仏をす、めんがために「捨閉」等といへり⁵⁰」といい、『諸宗問答口作集』が応答例を示す語句に触れている。ただし、そこでは以下のように經典の文や智顛が引き合いに出されている。

上人の『選択』をひきて謗法といふ、これ又所難とするにたらず。（中略）しばらく不堪の機に対して、ひとへに念仏をす、めんがために「捨閉」等といへり。しかりといへども、またく不生不閉、本願にあらず。故に「捨閉」等といふなり。（中略）しかも廢立の一義をもて謗法といはゞ、『阿弥陀経』の小善根不生の文、いかんが謗法といはん。⁵¹

『選択集』における「捨閉等」とは、不堪の機に念仏を勧めるためにいわれるという。廢立の義を謗法というのであれば、『阿弥陀経』の文が謗法といえるのかという。ここで注意されるのは、存覚が經典の文を引き合いに出す点である。經典は仏である釈尊に説かれるため、そこに謗法を認めるのは困難であろう。日蓮は『守護国家論』において、釈尊が諸経で勝劣を説く旨を述べている。たとえ『阿弥陀経』が法華宗徒における未顕真実の經典であっても、これを説く釈尊までは批判しづらいと理解され存覚に用いられたのではないだろうか。

引き続き『法華問答』は智顛を引き合いに出して次のように述べ

ている。

もし法花を難行道に撰ずるをもて謗法といはゞ、天台大師をも謗法の人といふべをや。しかるに大師は法花三昧をえて、しかも臨終に及て『法花経』を手にとりていはく、「この『妙法花』は本迹二門にして、その理深遠なり。さとりがたく入りがたし。しばらくをひて論ぜず」(智者大師)と。つぎに『観経』を手にとりて「すなはち西方にまうで、仏にまうあふてさとりをひらかん」(智者大師)といへり。かくのごときの現文に難易の義いよいよあらはなり。⁵³⁾

『法華経』を難行道に配当することが謗法であれば、智顛まで謗法の人というべきではないかという。智顛は臨終に際して『法華経』を手に取り「さとりがたく入りがたし。しばらくをひて論ぜず」といい、『観無量寿経』を手に取り「すなはち西方にまうで、仏にまうあふてさとりをひらかん」と述べるという。智顛においても『法華経』と『観無量寿経』に難易の義を有するという。なお、ここで智顛の発言として紹介される内容は、『法華問答』で智顛の西方往生を主張する文脈でも用いられる。⁵⁴⁾

以上、『法華問答』の主張を検討した。『法華問答』は經典を引き合いに出して廢立の義を述べている。また、智顛を用いて『法華経』を難に配当している。このような釈尊や智顛を用いる論法により、存覚が法華宗徒の反論を回避しようと試みた可能性が指摘される。

二一四 『法華経』と念仏に対する勝劣への言及

ここでは『諸宗問答口作集』と『選択集』と『法華問答』から推察される争点を踏まえ、宗論における存覚の論法を検討する。

『諸宗問答口作集』には「若シ法花経ハ劣念仏勝云人有ラハ之謗法異論無耶⁵⁵⁾」といい、『法華経』を劣に、念仏を勝に配当すれば謗法である旨の注意が認められる。ただし、これを認めればどのような展開が想定されるのか、『諸宗問答口作集』には示されていない。そこで『選択集』の文や『法華問答』における浄土門流への批判内容をうかがうと、法然を批判する展開が推察される。

『選択集』には「亦有⁵⁶⁾勝劣義。謂⁵⁶⁾雜善ハ是劣善根也、念仏ハ是勝善根也。」といい、念仏を勝、雜善を劣に配当している。また『法華問答』では『選択集』の文が引き合いに出され、法然を批判する内容が次のように示されている。

念仏を讚ぜんがために諸善をことごとく雜行となづく。あまざへ悪に待してしかも実とするところなり。『法花』これ一大事の因縁、諸仏出世の本懐、かぎりてこの『経』にあり。しかるに『法花』を難行のなかに撰して悪に待し麤悪等に待すといふ。⁵⁷⁾

上⁵⁸⁾ これすなはち謗法をのがれがたし、いかん。⁵⁹⁾ 『選択集』には念仏を讚めるために、諸善を悪に配当する旨が述べられているという。このことは『法華経』を悪に配当することであり、謗法であるという。

これら『選択集』と『法華問答』の記述により、先の「法花経ハ

劣念仏勝云人」とは法然を指すと考えられる。そして、『法華経』を劣に配当することは悪に配当することであり、謗法であるという法然批判への展開が推察される。このような展開を想定した争点が、『法華経』と念仏に対する勝劣への言及ではないだろうか。そこで以下、『法華経』と念仏に対する勝劣への言及という争点が存したと仮定し、『法華問答』の内容を検討する。存覚は『選択集』を注釈することで、念仏と諸行に勝劣の義を立てつつ、法然批判の回避を試みたのではないだろうか。

まず勝劣の義について『法華問答』は次のように述べている。

念仏はこれ本願の行なるがゆへに、諸善に超過して「実非雑善得為比類」といふことをあらはさんがためなり。これすなはち勝劣の義なり。かるがゆへに念仏の行者を芬陀利等にたとふ。芬陀利花は人中の花のなかにすぐれたるがゆへに、これを人中の好花・上々花・妙好花等となづく。かるがゆへに、この花をもて念仏のものにこれをたとふ。人中の好人・妙好人・希有人等といふなり。^⑤

念仏は本願の行であるため諸善に超過し、勝劣の義を有するという。このため念仏の行者を芬陀利等の花に例えるという。引き続き次のように述べている。

これすなはち念仏の機と諸行の機と相對して、念仏の機を好人・妙好人となづく。故に字訓に對せんがために「待惡」・「待羸惡」といふなり。法と法とに相對せば惡の言をなすべからず。

故にかみに法と法とを相對して勝劣を判ずるとき、実非雑善得為比類といひて惡の字を置ず。^⑥

花の例を踏まえ、念仏の機を好人や妙好人と名づけるといふ。この字訓に對應させるため惡の字が用いられるという。法と法を相對するときに惡の字は用いられないという。このため『選択集』には「ニザルコトヲ實非ノルニルコトヲ雑善得レ為ニ比類ト」^⑥といい、惡の字が用いられないという。引き続き惡の字について次のように述べている。

つぎにしもの後序にいはいはく、「それ速に生死をはなれんとおもはゞ、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門をさしをきてえらびて淨土門にいれ」（ニ選擇集ト。取すでに二種の法といふ、いかんが惡となづく。しかのみならず、『選擇集』のこゝろ、所々に諸行を明す。もし汝が所難のごとく行を惡となづけば、諸行往生のむねをあかすべからず。上人、いかんが善惡の二事にまよひて諸行を惡といはん、またあに往生をゆるさん。^⑦

『選擇集』に「二種の勝法」といわれるように、聖道門を惡に配当してはいないという。さらに『選擇集』が所々に諸行を明らかにするのは、行を惡に配当していないからであると主張している。

このように『法華問答』は、念仏と諸善における勝劣の義について、本願の行であることによると述べている。また、『選擇集』を注釈し、法に惡を配当していないと主張している。このような論法により、存覚は勝劣の義を立てつつ、法然に対する謗法の批判の回避を試みたと考えられる。^⑧

以上、『諸宗問答口作集』と『法華問答』に共通する四つの争点を挙げ、宗論における存覚の論法をうかがった。このうち存覚が釈尊、智顛、最澄を引き合いに出すことについて、法華宗徒の反論を回避する試みと考えられる。存覚は、法華宗徒が批判しづらい対象を釈尊、智顛、最澄と理解していたのではないだろうか。また、『法華経』と念仏に対する勝劣への言及という争点について、存覚は『選択集』を注釈することで、法然に対する謗法の批判の回避を試みたと考えられる。

おわりに

本論では法華宗徒が宗論のために自用した『諸宗問答口作集』を手がかりに、宗論における存覚の論法を検討した。これにあたり、まず『諸宗問答口作集』の先行研究を整理し所見を示した。

『諸宗問答口作集』の原本は発見されておらず、著者や成立年は不明である。ただし、著者については奥書や『秘蔵集』や『秘蔵録』によって日像との関連が指摘されていた。成立年については『諸宗問答口作集』が『観無量寿経』と『法華経』の成立順序に言及していることから、文永九（一二七二）年以降と推察された。

次に、『諸宗問答口作集』と『法華問答』から四つの争点を挙げ、宗論における存覚の論法をうかがった。

第一に、『法華経』に説かれる舍利弗が見た授記の解釈である。『諸宗問答口作集』は最澄『法華秀句』を根拠に、成仏までに歴劫

を要する授記であると主張していた。一方で『法華問答』は智顛『法華文句』を根拠に、方等における菩薩の授記であると主張していた。また、爾前にも得益が存すると主張していた。智顛は日蓮教学で重用される人物である。このため存覚が智顛を用い、爾前の經典を未顕真実とする法華宗徒の理解を批判するとともに、反論の回避を試みた可能性を指摘した。

第二に、法華宗における師資相承である。『諸宗問答口作集』は、法華宗は釈尊の所立であるから、相承がないと述べるのは謗法であると主張していた。一方で『法華問答』は、智顛や最澄を引き合いに出し、浄土門流に対して念仏無間と批判するのは『法華経』の深意を解さないためであると主張していた。その過程で法華宗における師資相承の問題を批判していた。最澄もまた智顛と同様に日蓮教学で重用される人物である。このことから、念仏無間への応答と法華宗徒における師資相承の問題について、存覚が智顛や最澄を用いることで反論の回避を試みた可能性を指摘した。

第三に、『選択集』における「且」と「捨閉闍地」の解釈である。『諸宗問答口作集』は、『法華経』を排除したり難に配当したりすることが謗法であると主張していた。一方で『法華問答』は同様の批判に対し、廃立や難易を述べることが謗法であれば、『阿弥陀経』の文や智顛も謗法といえるのかと反論していた。日蓮は『守護国家論』において、釈尊が諸経で勝劣を説く旨を述べている。たとえ『阿弥陀経』が法華宗徒における未顕真実の經典であつても、これ

を説く釈尊までは批判しづらいと理解され存覚に用いられたのではないだろうか。このような智顛や釈尊を用いる論法により、存覚が法華宗徒の反論の回避を試みた可能性を指摘した。

第四に、『法華経』と念仏に対する勝劣への言及である。『諸宗問答口作集』には、『法華経』を劣に、念仏を勝に配当すれば謗法である旨の注意が認められる。当該注意について、『選択集』と『法華問答』の記述により、法然批判に通じる展開が推察された。そこで、『法華経』と念仏に対する勝劣への言及という争点が存したと仮定し、『法華問答』を検討した。『法華問答』は、念仏と諸善における勝劣の義について、本願の行であることによると主張していた。また、『選択集』を注釈し、法に悪を配当していないと主張していた。このことは、存覚が念仏と諸行に勝劣の義を立てつつ、法然に対する批判の回避を試みたものと考えられる。

以上、四つの争点を検討した。このうち存覚が釈尊、智顛、最澄を引き合いに出すことについて、法華宗徒の反論を回避する試みと考えられる。存覚は、法華宗徒が批判しづらい対象を釈尊、智顛、最澄と理解していたのではないだろうか。また、『法華経』と念仏に対する勝劣への言及という争点について、存覚は『選択集』を注釈していた。このことは、存覚が念仏と諸行に勝劣の義を立てつつ、法然に対する謗法の批判を回避する試みであると考えられる。

以上、『諸宗問答口作集』を手がかりに、宗論における存覚の論法を検討した。今後の課題として、『諸宗問答口作集』の書誌学的

考察や、宗論の内容を収載する他の史料との照合による争点と応答内容の整理が求められる。

註

- ① 『浄土真宗聖典全書』（以下『聖典全書』）四、一四一―一五頁。
- ② このほか法華宗徒が他宗との対論を想定した類書として、池田令道は『金網集』、『法華問答正義抄』、『問答肝要抄』、『問答用意抄』などを挙げている（池田令道「身延文庫蔵 三位日進筆『破邪立正論』の紹介並びに考察」四八七頁）。関連する法然浄土教批判の書である『破邪立正論』も注意されよう。
- ③ 柴田章延「日蓮宗の宗論と問答」二四頁。管見に入った『諸宗問答口作集』に言及する先行研究を年代順に示すと以下のとおりである。『水呑町史』水呑町、一九五六年。小林定市「日蓮宗の伝来―日蓮の西国布教願望と日像の活躍―」『山城志』一一、一九九二年（のち『福山地方史論集』二〇一七年に収録）。同「沼隈半島を歩く」『ふるさと探訪―福山周辺の史跡めぐり十五選』備陽史探訪の会、二〇〇〇年。同「福山地方の日蓮宗文化財」『備陽史探訪』一〇三、二〇〇一年。同「備後法華に安芸門徒の源流」『備陽史探訪』一一四、二〇〇三年。柴田章延「存覚上人との宗論について」『諸宗問答口作集』重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会、二〇〇一年。同「重顕寺蔵『諸宗問答口作集』に見る、中世における日蓮宗の問答」『諸宗問答口作集』重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会、二〇一一年。同「初期日蓮教団における口伝について」『印度学仏教学研究』六二―一、二〇一三年。同「日蓮宗の宗論と問答」『現代宗教研究』四七、二〇一三年。池田令道「身延文庫蔵三位日進筆『破邪立正論』の紹介並びに考察」『興風』三二、二〇一〇年。
- ④ 本研究は同翻刻により『諸宗問答口作集』の内容を把握している。

また、付属されている現代語訳に示唆を受けた。

- ⑤ 柴田章延「存覚上人との宗論について」一八四、一八五頁ほか。
- ⑥ 柴田章延は存覚の対論相手が日行である根拠を次のように述べている。「この時代、山南近辺に日蓮宗寺院は、水呑町の重顕寺しかない。また日蓮宗僧侶は戎善院日行（一三四六）しかない。山南と水呑は道のりにして5kmほどしか離れていない。後に詳述するが、存覚による問答記録『法華問答』には、重顕寺に格護されている『諸宗問答口作集』の内容と符合する問答が記録されている。この宗論に登場する法華宗徒は『諸宗問答口作集』を所持していたことは明らかである。これらの状況を勘案すると、件の法華宗徒が重顕寺日行であることは間違いない。」（柴田章延「存覚上人との宗論について」一八五頁）山南と水呑の距離が5kmほどであることと、『法華問答』に『諸宗問答口作集』の内容と符合する問答が認められることを根拠としている。しかし、距離を根拠に論者を特定するのは困難であろう。論者の一人である存覚が京都から備後へ赴いているためである。また、『法華問答』に『諸宗問答口作集』の内容と符合する問答が認められる点についても他の事情、すなわち法華宗徒による辻説法のほか、共通の争点を有する『金綱集』や『破邪立正論』などの存在が注意される。まず、辻説法を聞けば対論を交えることなく法華宗徒の主張がうかがわれよう。次に、『金綱集』は遅くとも正中二（一三二五）年以降、複数の手によって書写されている。また『破邪立正論』の成立は正中二（一三二五）年あるいは嘉暦二（一三二七）年を下限とする論考が示されている（池田令道「身延文庫蔵 三位日進筆『破邪立正論』の紹介並びに考察」五一―五二頁）。存覚と法華宗徒の宗論はこれらの成立以降の暦応元（一三三八）年である。これらのことから、存覚の対論相手は日行に限定されないのではないだろうか。
- ⑦ 『諸宗問答口作集』二頁。底本の訓点には脱落あるいは省略と考えられる箇所が認められる。いずれも底本ママである。以下同。

宗論における存覚の論法

- ⑧ 本研究はこれらの内容に示唆を受けた。「相手が舍利弗の「感傷」を引き合いに出した場合の日蓮宗側の対応は、すでに想定されている。この存覚の反論に対して、日行は答えるすべをもっていただのだが、『法華問答』には記録されていない。或いは、日行は「此義堅可秘々々賢々々」と指示されているため、問答の序盤でもあることから答えることを控えたのかもしれない。」柴田章延「存覚上人との宗論について」一八七頁。「日蓮宗の相承についての難には回答が用意されている。しかし、存覚は記録するには値しないと思っただのか何も触れていない。」同「存覚上人との宗論について」一八八頁。「存覚は（中略）『諸宗問答口作集』の浄土宗問答の章に想定されている発言をしているのだが、日行がこれに反論したようには記していない。」同「存覚上人との宗論について」一九〇頁。
- ⑨ 『日蓮教団全史』上、一〇九―一一二頁。
- ⑩ 柴田章延「重顕寺蔵『諸宗問答口作集』」に見る、中世における日蓮宗の問答」一三九頁。
- ⑪ 『諸宗問答口作集』六七―六八頁。
- ⑫ 柴田章延「重顕寺蔵『諸宗問答口作集』」に見る、中世における日蓮宗の問答」一三八頁。
- ⑬ 『水呑町史』一五五頁。
- ⑭ 小林定市「日蓮宗の伝来―日蓮の西国布教願望と日像の活躍―」四三頁上。
- ⑮ 『仏書解説大辞典』改訂版、九、一〇五頁には『秘蔵記』の項目に『秘蔵集』のそれと考えられる記載が認められる。当該記載は日蓮宗現代宗教研究所の山本氏にご教示いただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げます。
- ⑯ 柴田章延「重顕寺蔵『諸宗問答口作集』」に見る、中世における日蓮宗の問答」一三八頁。
- ⑰ 『諸宗問答口作集』三八頁。
- ⑱ 柴田章延「重顕寺蔵『諸宗問答口作集』」に見る、中世における日

蓮宗の問答」一六九頁。

①9 柴田章延「重顕寺藏『諸宗問答口作集』に見る、中世における日蓮宗の問答」一六九頁。

②0 柴田章延「重顕寺藏『諸宗問答口作集』に見る、中世における日蓮宗の問答」一七〇頁。

②1 池田令道「身延文庫藏 三位日進筆『破邪立正論』の紹介並びに考察」四七九—四八〇頁。

②2 『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下『定遺』）五一八—五二二頁。

②3 池田令道は『法華浄土問答鈔』を引用し、次のように述べている。「法華経より「已説観経」「已説観経念仏」という日蓮の所論に対し、弁成は「観経雖已説経也」と前提を認めた上で反論に入っており、法華経と観経の後先は問題になっていない。つまり浄土側は、観経等を第三時・方等部とする天台の四教五時判を一応認めている。」

池田令道「身延文庫藏 三位日進筆『破邪立正論』の紹介並びに考察」四八〇頁。

②4 道綽（五六二—六四五）が『安楽集』で言及する『大集経』の内容について、直接引用であるか否かが問題とされている。『諸宗問答口作集』三一—三二頁。『金綱集』（『日蓮宗宗学全書』（以下『日宗全』）一三、一六九頁、一七七頁）

②5 『日宗全』所収の『金綱集』は諸本を合した体裁である。『日宗全』一三、一六九頁でいわれる道綽における『大集経』の引用姿勢への批判について、『金綱集』の諸本の原本を見たとする池田令道によると、嘉暦二（一三二七）年に成立したとされる「日王丸本」はこれを有し、それ以降の成立と目される「日進本」はこれを有さないという。池田令道『金綱集』に関する基礎的考察」七六頁—七七頁上、七八頁下。

②6 『大正新脩大藏経』（以下『大正藏』）九、一〇頁下。

②7 日蓮は『開目鈔』で智顛や最澄について次のように述べている。「像法の中には天台一人、法華経一切経をよめり。南北これをあだ

みしかども、陳隋二代の聖主眼前に是非を明めしかば敵ついに尽。

像の末に伝教一人、法華経一切経を仏説のごとく説給へり。（中略）されば日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだしぬべし。『定遺』五五八—五五九頁。「日蓮は諸経の勝劣をしること、華嚴澄観・三論の嘉祥・法相慈恩・真言の弘法にすぐれたり。天台・伝教の跡をしのぶゆへなり。彼人々は天台・伝教に帰せさせ給はずは誑法の失脱させ給べしや。『定遺』五八九頁。

②8 『諸宗問答口作集』一七頁。

②9 『諸宗問答口作集』一九—二〇頁。

③0 『諸宗問答口作集』二〇頁。

③1 なお、『伝教大師全集』三、四四頁には「発^{ルナリ}感傷之心^マ」とある。

③2 『聖典全書』四、七二—七三頁。

③3 『聖典全書』四、七三頁。

③4 『諸宗問答口作集』一頁。

③5 『諸宗問答口作集』三四頁。

③6 『大正藏』九、三二頁中。

③7 『諸宗問答口作集』四頁。

③8 『聖典全書』四、七二—七三頁。

③9 『聖典全書』四、七二—七三頁。なお、『聖典全書』には底本と異なる表記が認められる。『聖典全書』の「弘法大師『法華経』の題号を釈していはく」という箇所は、その校異によると、底本では「天台大師普門品を釈していはく」である。このため引用に際しては底本の表記を採用した。これに伴い引用元の「^{法華経}開題意」という語句を削除した。

④0 『聖典全書』四、七二—七三頁。

④1 『金綱集』の記述により、『法華経』と『観無量寿経』で説かれる阿弥陀仏について、一仏か他仏かという争点が存したと知られる。一仏であると主張するのが存覚である。「問、法華経阿弥陀与^ト観経弥

陀、一仏歎他仏歎」『日宗全』一三、一七八頁。

④2 「捨閉閣拋」の語源について、古来より次の内容が注意されている。「弥須三捨雜修專」『聖典全書』一、一二六頁。「隨他之前暫雖開三定散門、隨自之後還閉三定散門。」『聖典全書』一、一三一六頁。「速欲離三生死、二種勝法中、且闍三聖道門」選入三淨土門。欲入三淨土門、正雜二行中、且拋三諸雜行」選、應歸三正行。」『聖典全書』一、一二三四頁。

④3 『諸宗問答口作集』二八頁。

④4 『諸宗問答口作集』三三三頁。

④5 『諸宗問答口作集』三四四頁。

④6 『諸宗問答口作集』三四四頁。

④7 『諸宗問答口作集』三四四頁。

④8 日蓮教学において『法華經』より前に説かれた經典は未顕真実とされる。浄土門流が『法華經』を根拠に用いるのであれば、例えば浄土三部經を未顕真実の方便經と自ら認めることになるという法華宗徒の主張であろう。

④9 『諸宗問答口作集』三五五頁。

⑤0 『聖典全書』四、七三二頁。

⑤1 『聖典全書』四、七三〇―七三二頁。なお、『聖典全書』には底本と異なる表記が認められる。「聖典全書」の「不捨不閉」という箇所は、その校異によると、底本では「不生不閉」である。このため引用に際して底本の表記を採用した。

⑤2 「教主釈尊若於三諸經互説勝劣者不可有大小乘差別權實不同。若実無差別互説差別淺深等者諍論根源惡業起罪因縁也。」『定遺』九三頁。

⑤3 『聖典全書』四、七三三頁。なお、『聖典全書』には底本と異なる表記が認められる。「聖典全書」の「いふべきや」という箇所は、その校異によると、底本では「いふべをや」である。このため引用に際して底本の表記を採用した。

宗論における存覚の論法

⑤4 「かの「別伝」(智者大師)にははく、「この妙法花は本迹二門にして、その理深遠なり。さとりがたく入りがたし。且くおきて論ぜず。」『聖典全書』四、七一九頁。

⑤5 『諸宗問答口作集』三四四頁。

⑤6 『聖典全書』一、一三二八頁。

⑤7 『聖典全書』四、七三七―七三八頁。

⑤8 『選択集』は、善導(六一三―一六八)が念仏者を好人と述べることについて、悪に待する表現である旨を述べている。「然則「念仏者即是人中好人」者、是待悪而所美也。」『聖典全書』一、一三〇四頁。

⑤9 『聖典全書』四、七三三頁。

⑥0 『聖典全書』四、七三三頁。

⑥1 『聖典全書』一、一三〇三頁。

⑥2 『聖典全書』四、七三三―七三九頁。

⑥3 なお、『決智鈔』には『法華問答』より詳細に『法華經』と念仏の勝劣が述べられている。「諸經にをいてたがひに等・勝・劣の三の義あり。いま法華と浄土の教とを対せんにも、この三の義あるべし。聖のために即身頓悟を本とするときは、法華は勝なり、念仏は劣なり。凡のために順次往生を本とするときは、念仏は勝なり、法華は劣なり。いづれも仏智一乗にして、ともに出離の因となるかたは、二法またく等同なり。」『聖典全書』四、六九二頁。

参考文献

【書籍】

小野玄妙「編纂」『仏書解説大辞典』改訂版、九、大東出版社、一九六五年

小林定市「福山地方史論集」発行所不明(国立国会図書館には「備陽史探訪の会」と表記あり)、二〇一七年

佐伯見寿「編纂」『水呑町史』水呑町、一九五六年

- 浄土真宗本願寺派総合研究所 教学伝道研究室〔編纂〕『浄土真宗聖典全書』一、本願寺出版社、二〇一三年
- 浄土真宗本願寺派総合研究所 教学伝道研究室〔編纂〕『浄土真宗聖典全書』四、本願寺出版社、二〇一六年
- 重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会〔編纂〕『諸宗問答口作集』重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会、二〇一一年
- 比叡山専修院附属叡山学院〔編〕『伝教大師全集』比叡山図書刊行所、一九二七年
- 立正大学日蓮教学研究〔編〕『日蓮教団全史』上、平楽寺書店、一九六四年
- 立正大学日蓮教学研究〔編〕『日蓮宗宗学全書』一三、山喜房仏書林、一九六八年
- 立正大学日蓮教学研究〔編纂〕『昭和定本日蓮聖人遺文』改訂増補版、身延山久遠寺、一九八八年
- 設実行委員会〔編〕『諸宗問答口作集』重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会、二〇一一年
- 柴田章延「重顕寺蔵『諸宗問答口作集』に見る、中世における日蓮宗の問答」重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会〔編〕『諸宗問答口作集』重顕寺開山七百年記念事業建設実行委員会、二〇一一年
- 柴田章延「初期日蓮教団における口伝について」『印度学仏教学研究』六二―一、二〇一三年
- 柴田章延「日蓮宗の宗論と問答」『現代宗教研究』四七、二〇一三年

【論文】

- 池田令道「身延文庫蔵 三位日進筆『破邪立正論』の紹介並びに考察」『興風』三三、二〇二〇年
- 池田令道「『金綱集』に関する基礎的考察」『日蓮仏教研究』一二、二〇二一年
- 小林定市「日蓮宗の伝来―日蓮の西国布教願望と日像の活躍―」『山城志』一一、一九九二年
- 小林定市「沼隈半島を歩く」『ふるさと探訪―福山周辺の史跡めぐり十五選―』備陽史探訪の会、二〇〇〇年
- 小林定市「福山地方の日蓮宗文化財」『備陽史探訪』一〇三、二〇〇一年
- 小林定市「備後法華に安芸門徒の源流」『備陽史探訪』一一四、二〇〇三年
- 柴田章延「存覚上人との宗論について」重顕寺開山七百年記念事業建